

「発信力を磨いて社会を変える・倫理を変える」レポート 第10回

(2015/12/2)

糸川 昌成 先生

修士課程修了生・青山キャンパス VOD 小野洋子（大学教員）

「母の涙の意味は？」

感想を一言で述べるなら、感銘。

空襲の中を生き延びた戦中派の親を持ち、同じ時代を生きて、どこか同じような苦悩に向き合っているように思える糸川先生の話は、ずしんずしんと私の心に響いた。

もちろん、私などは足元にも及ばない人生なのだが、糸川先生のテンポ良い講話に活性化された私の脳は、「心が体に及ぼす影響」を本気で突き止めたいと考えていた 18 歳の春や、両親の介護と仕事の両立、途中からは修士論文も加わり自分を追い込んでいた5年間のことを想起し、数々の考えと思いが頭の中を駆け巡った。

自分ではどうにもできない願いを繰り返す父上の、その意味を汲み取った糸川先生は素晴らしいと思った。

「症状には意味がある」、今はその意味がよく分かる。それをもっと早く、母のBPSDと向き合っている日々に学べたらどんなに良かっただろう。明日は母の三回忌だが、最近になって自問自答が続いている。

私は母から何を奪い、何を葬ってしまったのか、母の心の中が見たい。老化や認知症についての学びは、発見の喜びと共に、私の未熟さを確信させ、落胆ももたらす。

今回は家でのVTR視聴だったので、お年玉の話あたりから最後までずっと涙しっぱなしで見入った。糸川先生のものがたりは、真実やご自身のルーツの探求なのだが、自分探しをされているのではないかと思う。

お母様が愛情を求めて起こした行動を紐解く糸川先生、私も一緒に想いを馳せると共鳴が起こり、なぜだか「3人兄弟のうち私だけがうちの子じゃない」と勝手に思い込んで悲嘆していた幼少期が思い出された。「家族を守る」という話とも合わせて、多感な時期の家族関係の大切さをかみしめた。

私が末期の母にできた唯一のことも甦った。

亡くなる数時間前、看護師さんが「娘さんが来られたわよ」と言っても、ま

まったく反応がない、すでに尿毒症が体全体に回っていた状態の母に、労いの言葉をかけた。

「壮絶な人生。もう苦勞しなくていいんだよ、お疲れ様でした」と声をかけると、母の目から一筋の涙がこぼれた。最後まで耳は聞こえているというから、聞こえたのかな？ 半信半疑で他にも色々話しかけたり体に触れてみたが、ぴくりともしない。

そこで試しに、しばらくしてからもう一度同じ労いの言葉をかけると、また一筋の涙が……。

この涙の意味は何か。延命治療拒否の自筆手紙を用意していたにもかかわらず、4つの病院のベッド上で最期の3年間を過ごした母、きっと本望ではなかったと思う。キーマンとして医療選択に関わった私に「もう充分だね。頑張らなくていいよね。私もお前も」そんな気持ちの現れだったのだろうか。

「実体化」についての話もとても興味深く、色々と思うところもあるのだが、こちらは著書を拝読してから考えをまとめることにしようと思う。

今回は欠席したことをひどく後悔した。たとえ講義に間に合わなくてもお蕎麦屋さんに駆けつけ、こんな風に素敵に「自分史」を語れる糸川先生と直接お話がしたかった。もし糸川先生と夏刈先生にお目にかかれたら、私の暗闇にも一筋の光が差し込みそう、そんなことを夢想した。

糸川先生

最後になりましたが、素晴らしいお話を、ありがとうございました。

VTRを2度視聴しました。この名講演を何回繰り返して見たら私の記憶に定着するだろうか？

そんなことを思いながら。残念ながらVODは限定1週間なので、折に触れて自分の心の中で反芻し、脳の記憶にとどめたいと思います。

いつかお会いできることを願っています。